

審査の結果の要旨

氏名 慶野 遥香

本論文は、我が国の心理職がどのように倫理的態度を発展させてきたかを明らかにすることを目的とした。論文は、問題意識と目的を提示する第1部、専門職集団の職業倫理について論じる第2部、現場の心理職の倫理的態度に焦点を当て2000年代後半の臨床心理士に関して検討する第3部、公認心理師誕生後の心理職の検討を行う第4部、研究成果の考察と心理職の倫理的態度の課題や発展の方向性を総合的に論じる第5部から構成される。

第1部第1章ではタラソフ論争を取り上げ、職業倫理の重要性を論じた。第2章では民間資格である臨床心理士から国家資格である公認心理師誕生までの経緯を概観し、倫理性向上の必要性を指摘した。それを踏まえ、第3章では論文の目的と構成を示した。

第2部では専門職集団としての職業倫理に着目した。第4章で職業倫理の理論的基盤として定義や実践の判断の指針となる倫理的意思決定モデルについて先行研究を概観した。第5章で海外の心理職の倫理綱領と職業倫理教育の現状を述べ、第6章では我が国には倫理綱領に具体的な倫理的基準が少なく、体系的な職業倫理教育も行われていないこと、現場の心理職が職業倫理をどう認識しているかを明らかにする必要性を指摘した。

第3部では臨床心理士の倫理的態度に関する3つの研究を行った。第7章では大学院生(n=24)の倫理的困難場面の判断と気づきを質的に検討し、丁寧な教育の必要性が示された。第8章では臨床心理士が職業倫理を意識するプロセスを質的に検討(n=35)し、「専門職としての責任感を持ち、対象者の最善の利益を目指す」倫理的態度が示された。第9章では臨床心理士の倫理的困難経験に関する質問紙調査(n=309)を実施した。秘密保持の問題が41.6%と特に多く、具体的基準や教育の不足、雇用形態の問題等が指摘された。

第4部では公認心理師誕生後の心理職の倫理的態度を検討した。第10章では職業倫理教育に関して質問紙調査(n=372)を行った。臨床経験や卒後の学習は職業倫理に関する自己評価を高める傾向が見られたものの、大学・大学院の学習経験は自己評価と関連が見出されず、教育の質の向上の必要性が示された。第11章は倫理的困難に関する再度の調査(n=372)を行った。第9章と比べ、連携の問題を含む幅広い問題と、自律的な判断や対応の難しさが見られた。この結果を踏まえ、第12章では組織や連携の場で起こる問題における倫理的価値基準を明らかにするために、フォーカス・グループ・インタビュー調査(n=22)を実施し、「倫理的価値基準をベースにした対話」が重要視されていることが示された。

第5部第13章及び第14章では、倫理的態度の変遷と課題の指摘、連携の問題に関する議論を行った。そして、今後の心理職の倫理的態度の方向性として、①自律した倫理的態度、②他職種・組織への開かれた態度を軸とした「対話に基づく倫理的実践」を示した。

本論文は、専門職の自律性に関わる心理職の職業倫理について、歴史的、社会的視点も交えて多角的な検討がなされている。先行研究の少ない分野において、当事者の体験に着目した倫理的態度の実証的研究を行った。そして、現代に特徴的な連携に関わる倫理的困難に関し、「対話」という新たな論点を見出し、倫理的態度の発展の方向性を示している。このことの意義は高く評価でき、博士(教育学)の学位を授与するに相応しいものと判断された。